「ことば遊び」の源流を解明する人

鈴木紘治著『マザー・グースの謎を解く—伝承童謡の詩学—』に寄せて

鈴木　比佐雄

鈴木紘治さんは、成蹊大学で四十年間も「マザー・グース」など英文学の講義・研究をしてきた学者であり、また日本の現代俳句を「ジャパンタイムズ」に翻訳し解説してきたバイリンガルの批評家でもある。と同時に鈴木さんは、若い頃には数百篇もの詩篇を作りそれらを昨年詩集にもまとめ、今も短歌などの実作者でもある。また本書の装画のような独特の色彩感覚や手法で多くの絵画シリーズを描いている。さらにクラシックの若手音楽家たちにその才能を世界で開花させるための助言をしたり、コンサートを企画するプロデュース活動もしてきた。英文学者が表の顔であるなら、別の素顔は詩人であり歌人であり画家でありクラシック音楽プロデューサーでもあり、たぶん私の知らないその他の分野の顔も持っていると推測している。鈴木さんと話していてとても刺激を受けることは、物事を創作・想像することの喜びを感じさせてくれることだ。それを「創造的な想像力」とか「根源的な独創性」などのように語り、個人の真の想像力や自由を解放することが、人間の生きる重要な存在理由であることを洒脱に語ってくれる。その意味で鈴木さんには、突き詰められた独自の想像力論が存在し、その理論に即して様々な芸術上の試みが楽しみながら実践されていると思われるのだ。

私は今回の『マザー・グースの謎を解く—伝承童謡の詩学—』を読んだ際に、真っ先に感じたことは、本業の英文学者である鈴木さんもまた「創造的な想像力」で「マザー・グース」の研究を続けてきたのであり、その論文を一冊の書物にして世に出し、「マザー・グース」を通して世界をもっと豊かに解釈しようと願っていると感じたことだった。

本書は六章から成り立っている。第一章「伝承童謡覚え書き—マザー・グースを中心に」は、「Ⅰ　マザー・グースの概観、Ⅱ　マザー・グースの特徴、Ⅲ　マザー・グースの言葉、Ⅳ　音楽性とイメージ（1音楽性、2イメージ）、Ⅴ　無名性と源泉、Ⅵ　郷愁と教育的機能（1郷愁、2教育的機能）、Ⅶ　わらべ唄との比較、Ⅷ　翻訳と受容」の七項目に分かれている。Ⅰ章は「マザー・グース」の成立過程とその研究の歴史を物語っている。鈴木さんは「マザー・グース」が、日本のわらべ歌に相当する、口承性・歌唱性に優れた〈伝承童謡〉であり、〈生活の詩〉でありながらも「想像力の働きにより非日常の世界にも遊ぶ〈非日常の詩〉」だと言う。イギリスでは童謡のことを「ナーサリー・ライム（nursery rhyme）」といい、〈子供向けの（脚韻を踏む）押韻詩〉という意味だという。一七六五年頃、ジョン・ニューベリーがナーサリー・ライムを収集・編集し『*Mother goose's Melody or Sonnets for the Cradle*』という本を出版したことで、「マザー・グース」の名は広まっていったという。それを現在のような形にまとめ上げたのが、ジェイムズ・オーチャード・ハリウェルだった。彼は、一八四二年にイギリスの伝承童謡の収集と分析を論じた『イングランドのナーサリー・ライム』を執筆し、約六〇〇篇もの口承詩を集めたという。鈴木さんはハリウェルのシェイクスピア学への業績以上に、後世に影響を与えたこの「マザー・グース」の蒐集・研究活動を高く評価している。「マザー・グース」とシェイクスピアの文学には、〈イギリス的田園生活〉があり、その風土や価値観を理解するために、鈴木さんは三度にわたる長期のイギリスでの在外研究をした。そのことによってイギリス人の発想の源になっている「マザー・グース」の世界を内側から解明しようと試みている。「マザー・グース」には、イギリスの様々な歴史的な悲劇も織り込まれていて、人間世界の悪や醜さも動物を擬人化させて伝えようとするなど、「意識の貯蔵庫」であると指摘している。そして具体的に「マザー・グース」の中に出てくる動植物の語彙やその音韻の連なりに深く分け入っていく。その探求の仕方は、イギリス的な生活様式の中で子供たちが、言葉を獲得していく現場を童心に還って追経験することによって、初めて可能となったのだろう。また「Ⅴ　無名性と源泉」などで分析されている興味深いことは、「マザー・グース」の題材やソースがもともとはバラード、フォークソング、迷信、伝説などの広義の〈大人の文化〉を長い時間と多くの子供たちの口承を経て〈子供の文化〉に創り上げられていったことだ。この〈時のふるい〉と〈子供のふるい〉を経たからこそ、「マザー・グース」は今も多くの人びとを魅了し続けているのだろう。

また「Ⅶ　わらべ唄との比較」は、日本の「わらべ唄」がさびしい夕暮れや夜の世界を描いているのに、「マザー・グース」が昼間の健康的で陽気でユーモアと機知に富んだ世界であることを指摘している。

しかし第2章「マザー・グースの謎を解く—《誰が殺した、コック・ロビンを?》をめぐって」では、ユーモアと機知に富んだ健康的な世界ではなく、〈死のテーマ〉が扱われている。

「Who killed Cock Robin?　誰が殺した、コック・ロビンを?
I,said the Sparrow,　わたしです、とスズメが言った。
With my bow and arrow.　わたしの弓と矢で
I killed Cock Robin.　コック・ロビンを殺したのです。」

引用したのは冒頭の一連だが、全部で十四連もある。その十四連を使って森の鳥たちの一羽一羽に葬儀の様々な場面に参加させている。イギリスの子どもたちは、この詩を読みながら死を自覚したり死者を葬るための行為を自然と言葉で理解したり、また森の中の鳥たちの名前や宗教心などの人間の心を「ことば遊び」から理解していくのだろう。さらにコック・ロビンとは誰かを歴史上の人物を推理し想像していくきっかけになっていく。鈴木さんは、コック・ロビンが義賊と言われたロビン・フッドであるか、リチャード一世であるか、ウィリアム二世であるかを詳しく当時の歴史を調べて自説を展開して最後に謎解きをしてくれている。

鈴木さんはその他にも第3章「マザー・グースにおける昆虫」第4章「マザー・グースにおける鳥」、第5章「マザー・グースにおける動物（1）」、第6章「マザー・グースにおける動物（Ⅱ）」などで昆虫、鳥、動物たちを名称の意味するものを当時のイギリスの暮らしを調べて克明に解釈してくれている。その「謎解き」の興味深く英語の基層を学ぶには最適なテキストになっている。そんなイギリスの文化遺産ではあるが、人類の文化財的な「ことば遊び」の世界の労作を研究者だけでなく、「マザー・グース」に興味を持つ多くの人に読んで欲しいと願っている。